

Photo (C)鈴木 モト

旅人（バックパッカー）が書き、旅人が読む、旅人のための旅ライフフリーマガジン

Brali

テーマ 出会い

特集 中東 改め イエメン

Chibirockの旅はくせもの 自炊派の手料理

HANGOVER in the WORLD

アジア漂流日記 世界のマクドナルドコレクション

Vol. 2

CONTENTS

■テーマ「出会い」

そこにある出会い

バングラデシュで姫になる

隕石を食べさせるモンテネグロ人

笑顔の世界地図

■おしえてタビテク

子供のてなづけ方

■旅で使えるデジタルアプリ

海外危険navi

■Chibirockの旅はくせもの

■HANGOVER in the WORLD

ミャンマービール

■旅人からの伝言 特集中東改めイエメン

イエメン

初アジア、初中東のイエメン旅

幸福のアラビア「イエメン」サナア

■トホホな話

■自炊派の手料理

とろとろスープ

■アジア漂流日記

■旅の便利グッズ

■世界のマクドナルドコレクション

■編集後記

■作者・情報提供者一覧

■次号予告

■記事募集

例えば体験やモノなどに対しても使ったりするが、やはり人だろうか。

69億分の1の確立。

出会いとは、結局は出会ったことに気がつくことなのかもしれない。

これから読み始める物語りが出会いとなるかもしれない。

テーマ 出会い

- そこにある出会い
- バングラデシュで姫になる
- 隕石を食べさせるモンテネグロ人
- 笑顔の世界地図

そこにある出会い

■Writer&Photographer

兼清俊太郎

■Age

22歳

■Profile

協賛金を募りながらアジアを旅する天然パーマな22歳の大学生。一昨年は100冊読書+書評、昨年はロンドンへ語学留学、今年はアジア放浪の旅。来年は大学生活最後、留学と旅をもとにした本を出版したいけど未定。

<http://ameblo.jp/shun-travel/>

そこにある出会い

旅は出会いに溢れている。そして、旅における出会いは人によって様々である。旅先では、旅人と話をする機会が沢山あるが、彼らの話を聞くと、旅人という存在は随分と似たような場所を旅しているのだなあとと思う。それでも彼らの旅がそれぞれユニークで面白さに富んでいるのは、行く場所がいくら同じだとしても、出会いが人それぞれ異なっているからだと思う。

僕にとっての「出会い」とは、現地人同士の出会いである。僕は現地人との出会いを語ろうと当初思った。しかし、あえて僕は自分自身が主体的に体験した出会いを語ろうと思わない。僕が見た現地人同士の出会い、それを語ることで、貴方の生活に「出会い」の機会を与えられると思うからだ。

僕は初めての一人旅にインドを選んだ。小学1年生の頃に父と父の同僚達に連れられてインドに行った僕は、「貧困」という言葉も「カースト制」という言葉も何も知らなかった。ただ見える景色、それが全ての答えだった。だから僕と同年の女の子が、何故学校に行かず、僕に手紙を売ろうとしているかなんて、全く理解できなかった。けど、そんな僕も学生になって国際政治を勉強したことで、そのような事情が少しだけ理解できるようになった。そこで僕は、本から学んだ「言葉」に現地での体験を「肉付け」をしたいと思った。それが僕の旅をする理由の1つである。



そのインドで僕が最も楽しみ、とても興味深く思ったのが列車内での交流である。インドの列車の座席は7つのクラスに別れている。エアコン付きで個室の座席だったら値段は高く、ファンしかついてない座席は当然安くなる。僕は、下から数えて2番目の「3-Tier Sleeper」通称SLクラスという寝台座席を主に使っていた。ゴミをゴミ箱に捨てる習慣のないインド故に、床にはゴミが散在し、わざと音を大きく鳴らすように設計されたと思えないファンが、頭上で僕らを威圧している。しかし、そんな劣悪な環境こそ、本当の等身大の現地人を見ることができる。僕はそれが楽しくてしょうがなかった。

彼らは突如として議論を始める。仕事をしたこともないティーンエイジャーから、大物なオーラを放つ年老いた軍人まで、様々な人が年齢の隔たりなく議論を始める。席は6人が向かい合って座れるようになっている。チケットを持っているのか疑わしい人が加わり、6人以上が座ることもあるのだけど、それがインドである。窮屈は感じないのではない、感じてはいけない。最初は「おお、日本人か。ようこそインドへ。」とウェルカムモードで迎えられても、さすがに議論になったら話に入れない。仮に彼らが日本語で議論したとしても、その熱気に押されて僕は発する言葉がないことだろう。



初めは、「よくもこうインド人は四六時中、何かを語っているもんだなあ。」と呑気に考えていた僕も、この現地人同士の出会いは日本でほぼ皆無であることに気がついた。朝7時、新宿行きの小田急線は所謂「通勤ラッシュ」。電車内は人でごった返すが、その電車内で議論をする人は当然いない。極端を言ったが、仮に混んでいない電車内でも隣の人、前に座っている人と言葉を交わすことが貴方にとって日常的だろうか。僕にとってそれは紛れもなく日常的ではない。しかし、そういう経験は幾度かある。その時、僕はとても嬉しかったことを記憶している。

「電車内で、隣に座っている人や前に座っている人に、話しかける必要性が無い」と言う人も居ることだろう。それに対して僕は同意する。しかしながら僕が感じるのは、インド人は必要云々で話をしているのではなく、ただ話しかけることに心の障壁がなく、とてもラフに話合っているということ。日本人の場合、どうも話しかけるということ、それ自体に抵抗がある、そこである。それは話しかける必要という問題ではない。「この電車の中は随分と暑いですね。」その一言さえ言うことを憚られる日本人の特異性が「出会い」を妨げているように思えるのだ。

「旅は出会いに溢れている」と僕は冒頭で言った。しかし僕は断言できる、「日本は出会いに溢れている」と。

旅をしていても、旅をしていなくても、「出会い」は何処にでも溢れている。いつも通勤で乗る

列車内、前の席の人に話しかけてみればいい。足しげく通うカフェ、隣の席の人に話しかけてみればいい。それが貴方にとってかけがえのない「出会い」となるかもしれない。僕は日本で知らない人に話しかける時、少しの勇気を必要とする。でも、僕の想像以上に相手は笑顔で僕を迎えてくれる。きっと多くの人も、そのような「出会い」を求めているんだと思う。その「出会い」の一步を今までお互いが歩めなかったのなら、これを読んだ貴方に最初にその一步を歩んでほしい。そうすれば、貴方の日々は旅と同様に「出会い」に溢れるだろう。

バングラデシュで姫になる

■Writer&Photographer

田中美咲

■Age

22歳

■Profile

少しでも多くの人が心から幸せを感じるような、対話のプロになる。田中美咲、1988/8/26(A型)です。

KEY WORD : バックパック旅(205日6大陸22カ国51都市)/瞑想修行/クリエイティブの可能性

前世はインドの姫/ヨガ/コーチング/渋谷で働くソーシャルアプリプロデューサー

Twitter : @misakitanaka

バングラデシュで姫になる



今年の2月私は、去年初めて地球の歩き方が出版されたという未開の地「バングラデシュ」に行くことにした。

タイ空港、バングラデシュ行き23:50発の飛行機はバングラデシュ人のみで、旅行者もいなければ、バングラデシュの女性もいない。さすが観光地化してないだけあるなと思った。それでも心細さや不安などなく、「バングラデシュに着いたら、インドみたいにそこらじゅうに人がいるだろうしなんとかなる！」と思っていた。しかし、いざバングラディッシュに着くと、空港には誰一人おらず、さらには宗教上の問題で、女性一人では外を歩いてはいけないと言われ、服装に関しても肌の出しすぎ（特にその時の私の服は半そでシャツ、デニム、ビルケンにリュック一つというラフすぎる格好だった）と注意されてしまった。そんなこともあって、深夜の空港内で待たされるハメに。

その時、ある白ヒゲの男性が声をかけてくれた。「予約してるホテルまで送るよ。」と。予約も何もしていなかったが、なんとか空港から脱出したかった私は、彼の車でゲストハウスまで向かうことにした。しかし、どこのゲストハウスも地球の歩き方に載ってる値段の倍以上にはね上がっており(歩き方の情報が古いらしい)、今後の旅の予算を考えると泊まれない。グズグズしている私を見越して、「俺の親戚の家にひとまず泊まればいい。」と言ってくれたので、ずうずう

しいが、一晩だけ泊らせてもらうことにした。

白ヒゲのおじさんは家族や親戚を呼び、親戚全員に紹介してくれ、さらにはバングラデシュの民族衣装（インドでいうサリーとかパンジャビ）のような服も私のために用意してくれた。食事から洗濯、お風呂まで全てタダで提供してくれた。



それからなぜか一週間ほどそこの家に住み込むことになり、街を散策する時は危険だからと言ってガードマンを付けてくれるし、車も用意してくれた。さらにはお小遣いもくれたり、バングラデシュ衣装も数多くいただいた。家のおじいちゃんとおばあちゃんにはイスラム教としてのあり方を学び、毎日5回アッラーのために祈りを行い、私にその大切さや生きることについて教えてくれたりした。一人でふらっと旅するつもりだったが、いつのまにかこの家族の一員として、食事からお出かけまで全てを共にしていた。バレンタインの日には、イケメンのガードマンとデートまでセッティングしてくれた。なんだか恥ずかしいが、すごく楽しかった。



バングラデシュ最終日。家族全員が朝早く起き、会社を休み、空港まで送ってくれた。プレゼントもたくさんもらい、おじいちゃんおばあちゃんからは抱きしめてもらったりと、本当の家族のようにしてくれ、本当に本当にうれしかった。こんな見知らぬ日本人の私を家に入れてくれ、全て世話してくれたこの家族を、第二の家族のように思えて涙があふれた。空港から飛行機が飛び立つまで、涙が止まることはなかった。

バングラディッシュで友達になった大学生に、facebookで後からいろいろと聞いていると、空港で助けてくれた白ヒゲのおじさんは、バングラデシュで最も有名な芸能人「アサドヌマ・ヌーン(私はこう聞こえた)」(独自のラジオやテレビ番組を持っている、日本で言うみのもんたみたいな存在)であり、国の中でも特に裕福な家族だったらしい。バングラディッシュでそこの家の服を着ていた私を、家族全員はお姫様として扱ってくれていたそう。



隕石を食べさせるモンテネグロ人

■Writer&Photographer

laidbacktrip

■Age

30歳代

■Profile

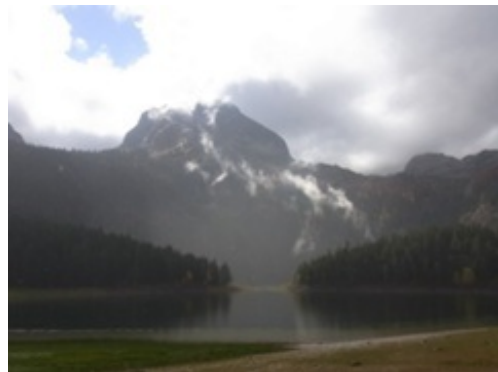
2007年12月に日本を出発。

チベットでDJ、インドでスノボ、イスラエルで映画俳優、ヒッチハイクでヨーロッパからサハラを越え、西アフリカで鼻血ブ〜。<http://jetkey.exblog.jp/>

隕石を食べさせるモンテネグロ人

東ヨーロッパのバルカン半島、アドリア海沿いにあり「Montenegro」は「黒い山」という意味らしく、あまりにも緑豊かな自然色濃い山は、遠くから見ると「黒い山」に見えたというのが、名前の由来らしい。

普段着の「モンテネグロ」が見たい。モンテネグロ人達は、どんな生活してるんだろう。その国の人達との出会いが、より濃厚になる「ヒッチハイク」で旅することになった。



アルバニア国境サイドまで、ホームステイ先のフランス人おばさんが車で送ってくれた。出入国審査も軽くすみ、パスポートには日付も間違っただけでスタンプされるいい加減な国。モンテネグロ国境から町までの公共交通機関は無いので、自動的に「ヒッチハイク」することになる。

ヒッチハイク開始。木々の茂った間に細い道が1本走っている。その道路脇で親指を立てる。早速、地元のおじさんも隣で親指を立ててる。公共交通機関が無い場所では、みんな協力しあって移動している。

アルバニア国境の町「シュコダル」～モンテネグロ首都「ポドゴリツァ」まで約40KMほど。東ヨーロッパの陸路国境越えは、インドの州を跨ぐ様な近距離と気軽さ。1時間で着く距離じゃん、まあ～余裕っしょ。。。てなわけで昼12時スタート。

1台目：英語がほとんど通じないが眼が優しい青年、ツナギの服装からして車修理工。緑豊かな山間を走り20分ほどして、なぜか彼の自宅へ寄り道。ザクロやミカン、キュウイが実る素敵

なお庭から、紺碧のアドリア海が望めるという素晴らしいお宅。バクラワ（アラブ諸国の名物甘味、シロップ漬けパイ）を戴きながら、なぜか彼の結婚式の映像DVDを鑑賞しながら、紅茶を戴く。自慢の奥さんの花嫁衣裳姿映像を見せられ、「バル」という街の近く、読み通り車修理工場で降ろされる。ヒッチハイクおやつ付きの自宅訪問スタイル。幸先すっごいフレンドリーじゃんモンテネグロ人。

2台目：スズキ軽自動車、運転席と助手席、モンテネグロ人男性2名。英語が通じた。黒帯の空手家で親日家だった。狭い軽自動車に、デカイバックパック2個と我が家2名で、パンパンだったが乗せてくれて「バル」港街まで。

この辺りでは、車に乗るたび（街ですれ違っても）「キーナ？（中国人）」「ヤパニ？（日本人）」と質問される事がほとんど。（無条件に中国人扱いも食らうが）「日本人」と答えると「グット」と言われる。

3台目：セダンのセルビア人男性。英語が通じた。つい2006年まで「セルビア モンテネグロ」だった国なので、セルビア人、モンテネグロ人、アルバニア人いろいろいる。ここからは公共バスがあるからと、「ポドゴリツァ」行きのバス停で降ろされる。なぜ「ポドゴリツァ」へ行くのだと、大半の人に聞かれる。どうしようもなく何もない場所だからだそうだ。

雲行きが怪しくなってきた。雨が降りそうな灰色の空。紺碧に輝いていたアドリア海も、空の色を移し灰色の海に見える。地元の人から評判の良くない「ポドゴリツァ」へ行く気がしなくなったので、そのままアドリア海沿岸部の道を、今日は行ける所まで行こう！と言う事で、バス停から離れて、再びヒッチハイク開始、北へ向かう道の脇で親指立てる。

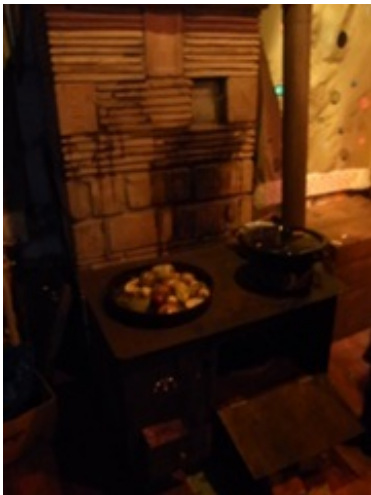


4台目：バリバリゴォゴォ音を立てて走るロシアンジープ。午後3時過ぎ。（12時に出発したのに、寄り道しすぎて。。。）クリアーサングラスをした白髪混じりのロン毛を後ろで一つで結んでいる男、推定45歳。アーミーカラーのロシアンジープの中は、山道具やらスノーボード用品やら何やらでギュウギュウ詰め。彼の持つ眼と取り巻く空気感が独自で、面白そうな人。只者では無いなあ、この雰囲気。「俺の人生は面白いぞ、おまえらの人生はどんななんだ？」と無言で説いてくる様だ。行き先など告げてもないのに、ギュウギュウの山道具をどかしてくれて「まあ乗れよ」と。器でかすぎだろ？ミスターモンテネグロ！この男は一体何者なんだ？

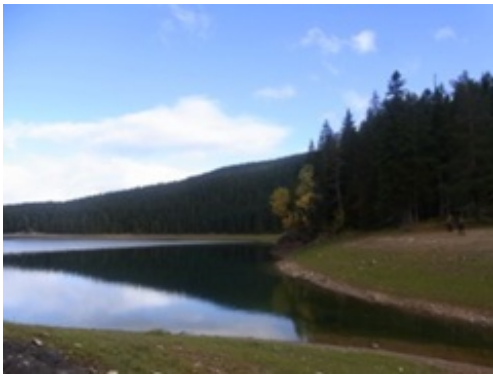


車に乗り込んですぐ土砂降りの雨。雨に打たれずに済んで助かった。だが、車の中は雨漏り。。ワイパーは途中で取れた。片言の英語で会話する。「俺の仕事は、オフロード」「街の車はコンピューターだろ？山に行くにはアドベンチャーな車だろ？」「車の中では音楽はいらない。ゴォゴォ唸るエンジン音やギアの音階、ワイパーの軋む音、これが俺にとっての音楽なんだよ。」ん〜いちいち片言の英語で放つ内容が濃過ぎる。この人の人生見てみたい。リアルなモンテネグロ人。いや人種を超えて、一人の人間として興味が沸く人物。

そんな中、今日の目的地「ポドゴリツァ」に着いたのだが、外は大雨。。。「俺は、ドゥルミトル国立公園の山へ行く途中だ。世界第2の長さのグランドキャニオンの地だ。そこに俺の家がある。今夜はそこで寝ればいい。どうする降りるか？行くか？」モンテネグロ初日にいきなり、観光ハイライト国立公園行きの車をヒッチハイクした様だ。この国立公園、実は行きたかったのだが、公共交通機関が不便そうで、若干諦めかけてた場所。彼の家がどんな環境なのか、どんな寝床かわからないけど、山装備ならフル装備があるし、米もパスタもスूपストックもバーナーもガソリンもバックパックに入っているの、1泊2泊なら何とでもなる。という事で、そのまま車に乗って、ドゥルミトル国立公園の山の中にあるという、ミスターモンテネグロの家へ。



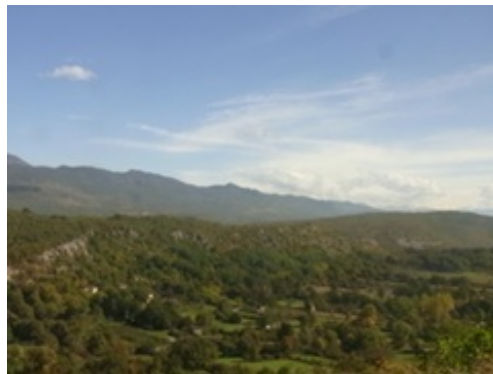
電気も水も無い「小屋」に着いた。ん〜やはり山男。雨漏りする車に乗っているだけの事はある。今夜は手強いが、想定内だなこの展開。小屋の中でビールを飲む5名の山男達と何やら話しをしたが（モンテネグロ語だし、英語通じず内容不明だった）その小屋を出て、また車に乗り込み山奥へとひた走る。「さっきの小屋は、俺の仕事のベースキャンプ地だよ」どうやら、キャックやパラグライダー、スキーなどのアドベンチャーツアー会社の社長らしい。「この渓谷に見えるホテルは、来年オープン予定だ。客室200あるからいつでも来いよ。」どうやら、ホテルのオーナーでもあるらしい。あれ？そっち？今夜の着地はどんな所だろう？この展開。ミスターモンテネグロ！君は何者なんだ？



ヒノキ生茂る深緑色の濃い森、広がる丘には可愛らしい山小屋が点在している素晴らしい景色。その隙間に広葉樹が赤色や黄色、山吹色など紅葉していて、現実味が無いほど、ヨーロッパの秋を演出している大自然。彼の家は、観光避暑地&スキーリゾートのメインストリートの真ん中にあるアーティスティックな古民家の山小屋ロッジだった。「俺は、広告や看板は出さない。ここは時間をトリップしてもらうための山好きが集うBAR&CLUBだよ」雨に濡れた身体には暖かい暖炉。モンテネグロ産ワインで乾杯し、山で採れたばかりの野菜と新鮮なチーズのディナーをご馳走になり、優雅な時と素晴らしい出会いのモンテネグロ初夜。

ヒッチハイクで出会ったとは思えない信頼感。そして、首から提げている石を見せてくれ、「これは宇宙からモンゴルへ来た石だよ」と片言の英語とジェスチャーで言って、大切そうな袋から砂をくれた。「食べろ」と。ジャリジャリしたけど、砂の味がしなかった。

「もう君達は、地球の旅じゃなく、宇宙への旅だよ」



笑顔の世界地図

■Writer&Photographer

ワールドハッカー

■Age

30歳

■Profile

元バックパッカーで、現在は職業ハッカー。

ブログ「World Hacks!」にて、海外旅行関連の情報を毎日発信しています。

<http://bit.ly/WorldHacks>

笑顔の世界地図



『どこかの星に咲いている一輪の花を愛していたら、夜空を見上げるのは、心のなごむことだよ。星という星ぜんぶに、花が咲いているように見える。』

サン＝テグジュペリ作『星の王子さま』にこのようなシーンがある。これは、星の王子さまが、自分の星に咲いている大切な一輪の薔薇を遥か遠く離れた地球から思い返す時、自分の星を含む夜空に輝く星々を眺めるだけで、全ての星に薔薇が咲いているように感じられ、心がなごむ。ということを意味しています。

さらにこのように続きます。『だれかが、なん百万もの星のどれかに咲いている、たった一輪の花がすきだったら、その人は、そのたくさんの星をながめるだけで、しあわせになれるんだ。』

私はこれまで旅してきて、この内容が理解できた気がしました。海外を旅していると、その国の観光を喜びに旅するというよりも、その国での出会いを喜びに旅をしているということに気づくことが多々あります。道を教えてもらった人、意気投合して一緒に食事をした人、宿でお世話になった人などなど、旅行中は出会いというものがそこらへんに転がっています。その出会いの中で忘れられないものが笑顔。間違いなく、一番印象に残ります。言語が通じなくても、笑顔によるコミュニケーションは不思議と通じます。こちらから笑顔で話しかければ、向こうも笑顔で返してくれます。言語よりも力があります。そして、何よりも心に残ります。



世界地図を眺めたとき、普通の人から見ればただ線で区切られた一枚の紙にしか見えないものが、出会いを経験した旅人からして見れば、地図のその国の上に、出会った人たちの笑顔が浮かんでいきます。その時の出会いを思い出してしあわせな気分になります。このような経験をした人は多いのではないのでしょうか。訪れた国で笑顔と出会う度に、世界地図の上の笑顔が広がります。また、出会った笑顔の数が増える度に、世界地図の上の笑顔が多くなります。



旅人は、知らず知らずの内に、このような「笑顔の世界地図」を作りながら旅しているんだと思います。多くの国を訪れ、様々な笑顔と出会い、より広く濃い「笑顔の世界地図」を持っている人、作り続けている人を羨ましく思います。さらに言うのであれば、「笑顔の世界地図」を広げていくことで、訪れていない国々の上にも、過去に出会った多くの笑顔と同様の笑顔が溢れているのだろうと想像してしまい、旅を終わらせることができないのではないかと思います。笑顔中毒とも言えるのではないのでしょうか。多くの旅人が旅を辞められないと言いますが、その理由の一つとして挙げるができるでしょう。



さて、この「笑顔の世界地図」ですが、出会った相手にとっても同じことが言えます。つまり、出会った人はあなたと同様に、その人の世界地図の日本の上に、あなたの笑顔が浮かんでいることになります。旅人は、自分の笑顔の世界地図を作りながら、相手に「笑顔の日本地図」を提供し続けているのです。あなたの笑顔が、多くの人の「笑顔の日本地図」の上で輝いています。

旅とは、単純ながらにして、奥が深いです。

これだから旅はやめられない。

旅を体験し、続け、重ねた者しか知らない「旅のテクニック」がある。
そんな賢人たちの「旅のテクニック」をご紹介しますコーナー。

子供のてなづけ方

その国や地域を知るには、子供と仲良くなって遊びや食べ物や文化を教えてもらうのも一つの手かもしれない。

日本の糞生意気な、いや賢いお子様たちとは違い、諸外国の子供達は好奇心が旺盛なので、その好奇心を利用しない手はない。

子供達の好奇心を最大限に引き出す方法を2つばかり教えていただいた。

1. チェキを使う

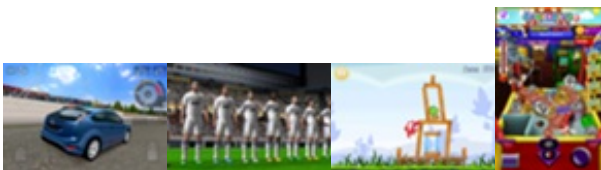
チェキとはご存知の通りインスタントカメラの小さい版みたいなもの。

アジアあたりだと、子供達は写真を撮られるだけでも喜ぶものだが、撮ってもらったものが目の前でプリントアウトまでされると、これから仲良くなろうと思っていたのに、プリントアウトした写真を親に見せるために持って走って帰ってしまう場合があるので要注意だ。それくらい歓喜してくれる。ただ、子供達が多いとあっという間にフィルムがなくなるので、少ない人数の 때가効果的だ。



2. スマートフォンのゲームアプリ

サッカーゲームやレーシングゲームや単純なパズルゲームなど言語を必要としないものをやらせてあげよう。もう二度と返してくれないのではと思ってしまうほど、はまってくれる。



と、てなづけるどころか、実は利用されているだけなのではないか？という感じですが以上ご紹介致しました。

このコーナーも2回目にして手詰まり感が読者にも薄々感じ取られるくらいの悲壮感が漂いはじめてます。

ぜひタビテクを教えてください。

旅で使えるデジタルアプリ

文字通り旅で使えるスマートフォンのアプリの紹介です。昨今ではスマートフォンやタブレットがバックパッカーの間でも普及し、旅の途中も離せない人が増加中。旅を助けてくれる、旅をもっと面白くしてくれるアプリを紹介していきます。

海外危険navi

旅に危険はつきもの。何より日本より安全な国なんて無いんじゃないでしょうか？
そういった心構えは必要なものの、しっかりと行き先の安全は確認しておきたいところです。
特に長期に渡り放浪している場合は次に向かう国の安全は確認しておきたい。
もちろん出会った旅人に聞くのもいいし、宿の情報ノートを読むのもいいです。
でも必ずチェックしておきたいのが、外務省海外安全情報ですね。

この「外務省海外安全情報」の情報をソースに立ち上げたのが
今回ご紹介するアプリ「海外危険navi」です。
もちろん無料アプリです。



使い方は簡単。

- ① 画面下のタブから「エリア別」をタップ。
- ② スクロールでエリアを選択し「選択する」をタップします。
- ③ するとエリア内の国が並びますのでスクロールして国を選択します。
この時点で国によっては赤、または黄色など危険度を表しています。
- ④ 「選択する」をタップすると危険度と詳細情報が表示されます。
- ⑤ さらに「更に情報を見る」をタップします。
- ⑥ すると上半分には更に詳しい情報が、
そして下半分にはWikipediaをソースとしたその国の基本情報が掲載されてます。
- ⑦ 画面左上の「戻る」をタップして一つ戻ります。
- ⑧ そして下の方の「地図を見る」をタップします。
- ⑨ するとその国の危険情報地図が表示されます。

- ⑩ また画面下の「危険度別」のタブをタップして検索すると危険度別に国を探することができます。



間違ってもこのアプリを使って危険度の高い国を制覇しようなどと考えないでくださいね。
くれぐれも安全な旅をお続けください。

珍スポットに魅せられて

■Writer&Photographer

chibirock

■Profile

Sigur RosとBeirut最頂のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>

切手集めが趣味の根暗なバックパッカー、ちびろっくです。ご縁があってこんな大それたコーナーを任されちゃうこととなりました。お構いなしに駄文を書き散らしますが、あたたかく見守っていただければ幸いです。

旅先を決める理由は多々ありますね。世界遺産が見たい、青い海でのんびりしたい、あれが食べたいこれが買いたいなんたらかんたら。わたしもそういう人並みの理由で行くわけなんですけども、そもそもは。しかしどうも行ったら行ったで気になるのは、日本人の想像力をはるかに絶する珍スポットばかり。1万もの仏に小馬鹿にされる「萬佛寺」、中国・シャングリラの無駄に巨大なマニ車、タイ・アントン郊外の地獄村「ワット・ムアン」、インドいち金とモラルのある街、チャンディーガルの彫刻庭園「ロック・ガーデン」、ミャンマーの高原リゾートにある寺院というのは名ばかりのテーマパーク「ペイチンミャアウン」...



詳細についてはそれぞれググっていただくとして、各々とんでもないベクトルへと突っ走っており、通常の感覚をもった日本人であれば「お気を確かに！」とたしなめたくなるような代物ばかり。そんなところばかり行っていたらそんなことばかりで頭がいっぱいになり、こないだ見た世界遺産とか、息を飲むほど大きな夕日とか、本来心に残るべきシーンは一切がっさい忘却の彼方へ。

一方珍ネタ不毛地帯ヨーロッパでは、薬局に掲げてある緑十字ネオンサイン探しに夢中に。「メガネ屋だからってメガネのサインになってるよ！」「あの点々の間隔がパックマンみたい！」...ノートルダム寺院もカテドラルもスルーしながら、街角で妙な光を放つ十字架を見つけては興奮し、写真に撮りためた初めてのヨーロッパ旅行。後悔はしていません。

こういった下らないスポットやネタは、一般的なガイドブック等で紹介されることはほとんどありません。こんなに面白い珍ネタを知らないなんて人生の8割損だよ！と、日本の皆様へ報告する義務があると思い込んでいるちびろっくは、Twitterやブログを駆使して、誰が読んでもとも知らずのまま、好き勝手珍ネタを晒しています。つい先日、人柱となってレポした珍ポンドリングの記事に「いいね！」がいっぱいついたことから、もう「珍ネタハンター」として食べていく道を構築していこうかと本気で考えていますが、誰か止めた方がいいと思います。



HANGOVER in the WORLD

ミャンマービール

ミャンマーに入国してまず最初に飲んだビール。

ミャンマーの代表的なビールその名もミャンマービールだ。



今まで東南アジアを7ヵ国回り、暑い各国で飲んだ冷たいビールは、なんともなんとも美味しい。どこも美味しいのだが、順位を付けるとミャンマーに着くまでは、カンボジアのアンコールビールが東南アジアNo.1ビールだった。柔らかい口当たり、後味もずっと引く、暑いときにゴクゴクといけて渴いたのを潤してくれる。思い出しただけでも酔ってしまいそうな美味しいビールだった。

ヤンゴンに着いて、仕事できている友人と食事をした時「このミャンマービールが旨い!!」と聞かされた。でも、やっぱりアンコールビールの方が旨いんだろうなと思いながら、飲んだとたんにランキング表が変わった。ミャンマービールが初登場1位に躍り出た。

アンコールビールと同様に、柔らかい口当たりで後味がずっと引くビールなのだが、ミャンマービールの方が味が濃い。ただ苦みもずっと引くので、ビールが苦手と言う人にもオススメできるビールだ。アルコール度数は5%と日本のビールと変わらない。でもスイスイ飲めてしまって、いつの間にか気持ちよく酔っている感じになる。

ミャンマーの食堂に入って片言のミャンマー語で注文する。「セッター、キンデー」(羊肉、焼いて)。店員さん「オーケー、マトンね」なんだ英語が通じる。ちょっと安心して「ミャンマービーヤー」も注文。ミャンマービールはミャンマー語でも「ミャンマービーヤー」。あまりに美味しそうだったので、写真を撮るのを忘れて食べた。でも、心の中には美味しいマトンがいつまでも残っている。

ミャンマービールは大瓶640mlを食堂で飲んで1800チャット=約180円。値段も安い。スーパーでも大瓶640mlが1100チャット=約110円で購入できる。美味しくて安いなんて、盆と正月のようだ。

ヤンゴンの街角、至る所でミャンマービールの看板を見る。



でも、やっぱり飲みやすいビールよりガツンと強いビールでなくちゃという辛口な諸兄姉には「ミャンマービール・ダブルストロング」。アルコール度数9.9%とビールにしてはかなり高い濃い味が口にガツンと当たって来る、体当たりのようだ。だが、後味は不思議なほどスッキリしていて飲みやすい。ビールの苦みが好きな方にはこちらがオススメ。スーパーで大瓶640mlが1400チャット=約140円と、300チャット、ダブルストロングの方が高い。



正直、ミャンマーで美味しいビールが飲めるとは思ってもいなかったのが本音だ。よく考えると、現在自分の東南アジア2位ビア、アンコールビールのカンボジアも、最初はビールが美味しいというイメージは皆無だった。そして、ミャンマーとカンボジアは両国とも他国からは戦争と社会主義のイメージを持たれている国だ(もちろん実際に行ってみるとイメージが変わるが)。過酷な国歴の中で「国民の楽しみ」としてのビールが成熟して、美味しいビールが生まれたのだろうか。あくまで自分の推測と妄想に過ぎないが、そう思えてくる。

■情報提供

五十嵐圭

2011年4月に会社を辞めて半年間のバックパック旅行中。

初めての一人旅に戸惑いながら東南アジアを中心にフラフラと移動しています。

ブログ：つれづれ報告書

<http://turedure2006.blog.so-net.ne.jp/>

旅人からの伝言

特集

中東 あらため イエメン

なぜなら、イエメンの話しか
集まらなかったから。
つまり、イエメンが熱い？

- イエメン
- 初アジア、初中東の
イエメン旅
- 幸福のアラビア
「イエメン」サナア

(C)鈴木 モト

旅人からの伝言

特集

中東 あらため イエメン

なぜなら、イエメンの話しか
集まらなかったから。
つまり、イエメンが熱い？

- イエメン
- 初アジア、初中東の
イエメン旅
- 幸福のアラビア
「イエメン」サナア

(C)鈴木 トモ

■Writer&Photographer

鈴木モト

■Age

30歳代前半

■Profile

男性 静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84（100M）
美容師免許、管理美容師免許取得。

MIXIコミュニティ、「鈴木が書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。

http://mixi.jp/view_community.pl?id=3502328

現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。

ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」

<http://ameblo.jp/roundtheworld200130/>

イエメン

ホンダの原付カブにまたがり、アクセルを全開にし、いつもと同じ道をひた走る。そして前カゴいっぱい積んだ新聞を、一軒一軒いつもと同じ家々のポストの中に入れてゆき、日が暮れる前にすべての新聞を配り終えた。家路に着き、ホンダのカブを駐車場に止め、ヘルメットを脱ぎ、汗をぬぐう。家の玄関のドアを開けると、いつもと同じ様に愛犬のヤックルがキャンキャンと吠えながら俺に飛びついてきた。日本に帰ってからの、いつも通りの日常。ヤックルの頭を軽くなでてやり、ニューバランスの靴を脱ぎ、階段を上る。自分の部屋のドアを開け、古びた黒いソファにずっばりと腰を沈め、今日も1日疲れたなと思いながら、深くため息をつく。

リモコンに手を伸ばし、TVをつけると若い女の子のグループが楽しそうに踊っているCMが流れていた。そして、相変わらず俺の部屋は、脱ぎっぱなしの服や読みかけの本がいくつも散乱していた。旅から帰ってきてすでに数ヶ月も経つというのに、まだ一度も部屋を掃除してなかったなと思い、思わず頭をかいてしまった。そろそろ掃除をしなければ、横になるスペースも無くなってしまうだろう。散らかった部屋を改めて見渡すと、部屋の入り口近くに、エンジ色のバックパックが転がっているのが目に付いた。だらしなく開いたバックパックのチャックからはストールがちょこんと顔を出し、旅から帰ってきたあの日の姿のままでひっそりと存在感を消すように部屋の隅に転がっていた。

俺はソファから重い腰を持ち上げると、75リットルの使い古したバックパックを持ち上げた。1年8ヶ月間共に旅した、このバックパックという相棒は、こんなに重く、こんなにも汚れていたのかと改めて思った。そして俺は乱暴にそれをひっくり返した。大きく開いたチャックから、さまざまな物が飛び出し、ジャラジャラと音を立てて床の上に落ちた。下痢止めの錠剤や

抗生物質、旅で着ていた薄汚れた服、ボールペンやノート、そしてインドで買ったカラフルなストール。さらに激しく揺ると、サイドのポケットから1枚のCDがポロリと落ちた。そのCDを見て、懐かしさのあまり思わず声を上げてしまった。まだ封を切っていない真新しいCD。CDの表紙には、油絵の様なタッチで、中東でよく見られたモスクの絵が描いてあった。そして大きく英語で「アザーン」と書いてあった。確か、世界中のアザーンを何種類も集めてあるアザーン専門のCDだったはずだ。イランで仲良くなったおじさんが俺にプレゼントしてくれたCDだった。



中東やイスラム圏に居た頃、毎日毎日、町のスピーカーというスピーカーから大音量でアザーンというものが鳴り響いていた。初めてアザーンを聞いた時、俺は何の歌を流しているんだろと不思議に思ったが、お祈りの時間を知らせる為に流してるんだよと、友達になった日本人が教えてくれた。以前誰かのブログで、アザーンの事を、「サッカーの試合前に歌う、君が代に何だか似てると思った」と書いてあるのを読んだ事があったが、男性が独特のメロディーで歌い上げるアザーンを聞いた時、あながち間違いじゃないと思った。

早朝の大音量のアザーンにびっくりして、何事かと飛び起きてしまった事もあったが、中東に長く居た為か、アザーンを聞く事が、生活の一部となった。毎朝、大音量のアザーンに起こされる事で1日が始まり、夕方のアザーンを聞きながらそろそろ夕食の時間だなと思いながらレストランを探した。



俺はCDのジャケットを無造作に破くと、使い古した東芝のパソコンを立ち上げ、イラン人のおじさんが買ってくれたアザーンのCDを取り出し、パソコンに入れた。そして再生ボタンを押した。アザーンを聞くだけなのに少しドキドキしている自分が何だかおかしかった。数秒すると、無機質なパソコンの画面から独特の声で男性が歌うあのアザーンが流れ出した。

俺は、懐かしさのあまり、両手で顔を覆ってしまった。さまざまな中東での思い出が、一瞬でフラッシュバックした。イスラム圏独特のあのファッション、ちょっと慣れ慣れしい程のフレン

ドリーな人々、野良犬やヤギがウロウロしていたあの路地裏、少々おせっかいな人々、好奇心に満ちた子供の様な目をしたおじさん達、そしてあつかましい程の親切。さまざまな事が思い出され、懐かしさのあまり涙が出そうになった。日本で働いている「今」と、旅をしていた「過去」の日々。あまりにも違う毎日のせいか、アザーンのメロディーを聴いていると、旅していた頃の事が遠い遠い過去の出来事のように感じた。自分の部屋のソファーに沈み、旅の感傷にふけていると、仕事をすべてほっぽり出して、また中東やイスラムの国々に帰りたくなってしまった。

俺が旅した中東。そしてイスラムの国々。俺にとって中東とは未知の世界であったが、実際訪れてみると、自分の中に漠然とあった中東のイメージが音を立てて崩れていった。それと同時に、自分の中で作られていた常識や価値観も同じように崩れていった。

個人的に最も良かったと思う所が、幸福のアラビアと言われている「イエメン」だろうか。イエメンの人々はまるで、映画の衣装の様なスタイルだった。女性達は、チャイドルという黒い服を頭からずっぽり被り、顔や口を黒いマスクで覆い、目しか露出していなかった。そして男性は、頭にターバンの様なものを巻き、ボクシングのチャンピオンベルトの様な黄金色の大きなベルトを誇らしげに腰に巻き、そのベルトにジャンビアという短剣をざっくりと挿していた。そして男性は皆、「カート」と呼ばれている軽い覚醒作用のある葉っぱをほった一杯に頬張り、それをクチャクチャと噛みながら、朝から晩まで仲間とのおしゃべりに花を咲かせていた。



世界遺産に登録されている旧市街の家々は、泥を塗りたいくった様な外壁に、茶色や白のペンキを塗り、まるでお菓子の様な家だった。そして迷路の様に入り組んだ路地裏に迷い込むと、すぐに方向を見失ってしまった。石畳の道を、荷物を積んだ口バが行き交い、裸足の子供達が元気に走りまわっていた。子供たちは外人の俺を見つけると、キラキラした好奇の目で見上げてきた。



バザールにはいくつもの露店がひしめき合い、カラフルなスパイスがいくつも売られ、香辛料の独特の匂いが立ちこめていた。先程さばいたばかりであろう、新鮮な羊の肉が生々しい姿で売られ、その店の前を野良犬がウロウロし、おこぼれを狙っていた。肉屋の親父が一喝すると、野良犬達は、すごすごと一時的に退散するものの、時間が経つとまたチャンスを狙う様に、肉屋に少しづつ近づいていった。露店には、カラフルな野菜達がこぼれ落ちそうな位、山盛りで積まれ、黒いチャイドルを着た主婦らしき人達が、じっくりと品定めをしながら、手に持ったカゴに野菜を入れてゆく。



日が傾き、乾いた日差しが黄金色に変わる頃、大音量でかかるアザーンを聞きながら、短剣を腰にさしたイエメン男性やチャイドルをまとった女性達にもまれ、さまざまな匂いや煙の立ち込める活気あるバザールを歩いていると、一体自分は何処に迷い込んでしまったんだろうと、不思議に思ってしまった事もあった。ツーリストのほとんど居ないその町は、映画のセットのワンシーンの様な、味のある異世界だった。



そして中東やイスラム圏を旅して、彼らには本当に良くしてもらったと思う。優しくったと思う。午前3時に列車で目的地に到着してしまい、どうしようか悩んでいると、列車で隣の席だ

った家族連れのおじさんが家に招待してくれて、昼まで寝かせてくれた。地図を広げているだけで道に迷っているのか？と皆に囲まれ、目的地に連れて行ってもらった。道を尋ねると、タクシーを使って俺を目的地まで送り届けてくれた事もあった。もちろん不快な思いもする事もまるで無かった訳ではないが、どうして言葉も通じない外人の俺に、こんなに親切にしてくれるのだろうと不思議に思った事もあった。そして本当に親切な人ほど、恩を売ってこなかった。

何だかとても懐かしい出来事だったなと、天井を見上げながら旅を思い返していると、いつの間にかアザーンのCDが終わり、無機質なTVからは、ネクタイを締めた真面目そうなニュースキャスターが、無表情で暗いニュースを読み上げていた。何だか現実に戻された気分になり、俺は再びパソコンの画面の再生ボタンをクリックし、アザーンを大音量で流した。アザーンがTVの音をかき消していった。旅していた頃が、遠い過去の出来事に感じた。

今思えば、旅してた頃は、毎日時間がゆっくり流れていた。好きな本を好きなだけ読めた。急ぐ必要も無いから、歩くスピードも亀の様に遅くなった。世界中に引越すのが日課になった。財布からお金をしようとした男に、思い切り中指を立てた事もあった。路上で転がっている汚れた子供達をみて、どうする事も出来ない感情を覚えた事もあった。素晴らしい景色を見て、言葉を失った事もあった。世界には、こんなにも多くの見所があるなんて思っていなかった。こんなにも世界が近くて、世界が広いとは思っていなかった。

俺はまた旅に出ると思うけど。あとどれ位旅するかわからないけれど。俺はもういい歳で、貯金も全く無いけれど。人生そんなに甘くは無いかもしれないけれど。旅から帰ってきたら、新聞配達位しか仕事は無いだろうけど。

戦争の無い平和な国に生まれて。屋根のある所で毎日寝れて。飢えとは無縁の生活が出来て。何処の国にでも行けて。五体満足で。それだけで幸せかなとも思って。それを忘れず生活していくべきなのかなと思ったりもして。旅に出て、考え方が少し変わったと思った。そして、そろそろまた、日本を出ようかなと思った。

日本はビザ無しで旅行出来る国の数が世界第1位という奇跡の国だと聞いた事がある。さらには、日本という国は多くの国々に支援してきたせいか、あまり嫌われていない。宗教間の対立も無い。「人生」とは、「死ぬまでの暇つぶし」と誰かが言っていたが、地球を自由に旅してその「暇つぶし」が出来れば、ある意味最高かなとも思ってしまう。日本のパスポートという、最強のパスポートを持って、また地球を散歩してこようかな。だって俺は、「地球」という気まぐれで巨大な彼女に、すっかり惚れ込んでしまったのだから。

数週間後、職場に別れを告げ、わずかなお金を持って俺はまた、あての無い旅に出かけた…。

初アジア、初中東のイエメン旅

■Writer&Photographer

bin

■Age

26歳

■Profile

2009年春に初海外&初一人旅をデビューし、これまで東欧を中心に10ヶ国てくてく散歩。好きな国：①チェコ②ブルガリア③イエメン。

Blog：【bin】世界中がおもちゃバコ

<http://bintravel.exblog.jp/>

初アジア、初中東のイエメン旅

イエメンと聞いてイメージするもの…。

最近だと、民主化運動が激化しての内戦、サレハ大統領爆撃暗殺未遂事件、アル・カーイダ関連のテロ、部族紛争etc.日々メディアはこういった関連の事件が大々的に報道されている。

もちろん、そういった事実はあるのだろう。でも、日々の報道を見聞きしているうちにふと思った。治安面で取り上げられている国の中にも、人々は住んでおり、コミュニティがあるだろう。そうすると、我々日本人から見ると貧困の差は少なからずあったとしても、そこに住んでいる人々にも日々の幸福があるのではないのか？

でも、想像を絶する暮らしぶりだったりするかもしれないし、考えても分からなかった。

だから行ってみた、イエメンへ。



そこに住んでいる人々。

一人の男性が近づいてきて「お金をくれ」と小声で呟いた。僕は悩んだ挙句、お金を渡さずに断った。その後、しばらく周辺にいたイエメン人達と楽しく会話していた。よく見ると、その輪の中に、先ほどの「お金をくれ」の男性が混じっていた。どうやらもう、「お金」は“過去”の出来事で、みんなでお喋りしている“今”の方が楽しくなったようだ。

別の時、買い物をせずにぶらぶら散歩していたら、観光地でよくある「何か買って！」に出会った。もちろん商売のため、観光客に声をかけるのは彼らの仕事である。僕はいらないと断った

。すると次の瞬間、彼らが発した言葉は「じゃあ、お喋りしようよ！写真撮って！」だった。どうやらここでも、もう商売は“過去”の出来事で、無理だと思った瞬間“次”の楽しさを探しているようだった。僕はその後、彼らの店に招待されてチャイを御馳走になり、会話を楽しんだ。

彼らはホントに切り替えが早い。そして人懐っこい。たくさんの人達と仲良くしたいだけなんだ。僕らと同じで。



世界遺産ソコトラ諸島で。

イエメンは世界遺産が全部で4つあり、僕はこの旅でサナア旧市街、シバームの旧城壁都市、ソコトラ諸島の4つに訪れた。そのうちソコトラ諸島は、2008年に自然遺産登録され、インド洋のガラパゴス諸島とも呼ばれている。このソコトラ諸島で事件は起きた。



イエメン到着後、乾燥した空気と砂ぼこり、連日の移動による疲労からか、海沿いのキャンプに宿泊している最中に急激に体調を崩したのだ。日本から持参していた薬を飲んでも一向に体調は良くなり、夜中に寒気と汗の繰り返しで何度も目が覚め、朝を迎えると体が起き上がらなくなった。何とか体を起こして立ち上がっても、まっすぐに歩けずフラフラした状態だった。もちろんこの日のトレッキングは中止し、電気、水道、ガスの設備の無いキャンプ場で、僕は一人寝て過ごしていた。どのくらいの時間を寝ていたか分からないが、運転手が残りの人達をトレッキングの場所まで案内した後、心配して戻ってきた。思考回路がはっきりしない僕は、運転手に促されるまま車に乗った。彼は英語を全く話せないし、僕はフラフラだったので、無言の車内はどこに向かっているのか理解できなかった。しばらく車で走った後、ここで降りろと言われた。何がなんだかわからない。運転手の後を、足を引きずりながら僕は追った。

一軒の家が見えてきて入ると、中にはたくさんの子供や大人の男女がいて、僕を興味深く見つめていた。奥に案内された所でやっと理解できた。ここは病院だった。まるでDr.コトーの診療所のようなひっそりとした病院。優しくそんな顔をした先生らしき人に症状を伝え、注射を打つことを提案してきた。すぐに頭をよぎったのは、「使い回しの注射」だった。一生懸命断ると、

周りの子供や大人に笑われた。注射が苦手だと思ったのだろう。それが悔しくて、注射を了解した。内心はすごくドキドキしていたが、僕の心配をよそに袋に入った新しい注射が出てきた。僕は安心して、言われるがままにお尻に注射を打ってもらった。自分でお尻を突き出して、立ったまま。

注射を終え、薬をいただき、僕は帰された。彼らはお金を受け取ってくれなかった。観光客として好きでこの島に来て、勝手に体調を崩して、貴重な薬を投与してくれたのにも関わらず。彼らの好意により、僕はその後体調が良くなった。何一つ、お礼が出来なかった。彼らも望まなかった。それでも住所くらい聞いていれば、帰国後お礼が言えたのに。当時の僕はフラフラだったので、そこまで頭が働いていなかった。小さくて自然に溢れた島の、人々の無償の好意。僕はこの島で、「旅人とは何か」と考えさせられ、未だ答えを出せずにいる。だからまた旅に出るのだろう。失敗を繰り返しながら成長するために。



幸福のアラビア「イエメン」サナア

■Writer

岡部能直

■Age

33歳

■Profile

世界の絶景や世界遺産を中心に旅を続ける旅人。七大陸制覇の経験を生かし、世界各国についての旅コラムを執筆。『世界のどこかで何か叫ぶ・・・かもしれない。』<http://ameblo.jp/ok-be/>

■Photographer

Sayaka

■Profile

100カ国訪問を目指し、世界の秘境、民族、珈琲を求めて女一人旅。現在61カ国。

「WORLDJOURNEY」<http://ameblo.jp/sayaka821/>

幸福のアラビア『イエメン』サナア

世界一のスカイスクレイパー「バージュ・ハリファ」、ランドマーク的存在の7つ星ホテル「バージュ・アル・アラブ」、人工衛星からも見えるというヤシの木を模した人工島「パーム・アイランド」、その他にも高層ビルが立ち並び、高級ブランドショップ、高級ホテルが乱立。高級という名を欲しいままにするUAEアラブ首長国連邦ドバイ。

だがしかし、そんなオイルマネーに沸くUAEと同じアラビア半島に位置しながら、アラブ最貧国といわれている国がある。アラビア半島の先端に位置するイスラム教国家、イエメン共和国。

実は、僕はアラビア半島こそ知っていたが、イエメンという国がその半島の先っちょにあることは全く知らなかった。旅の途中で、首都サナアの旧市街がまるでアラビアンナイトの世界のように美しいということ、ソコトラ島という島が良い意味でヤバイということ、そんな抽象的な情報を旅人伝いに聞き、僕はイエメンに向かった。

僕が首都サナアの空港に降り立ったのは2010年7月。イスラム圏は初めてではなかったので、ちょっと埃っぽいような空気、右から左に蛇が這っているように流れるアラビア文字、道路を行きかう古びた車など、空港から旧市街までのタクシーの中からの車窓は、イスラム教国家に再び来たんだなぁと思わせるには十分だった。

ガイドブックも何も持っていなかった僕には、イエメンについての知識はほぼゼロ。知っていたのは、イスラム教国家であること、首都サナアとソコトラ島以外は危険だということ、アラビ

ア語が公用語であること。そんなことくらいだった。

色々調べてみると、アラブ最貧国でありながら『幸福のアラビア』とも呼ばれるイエメンの歴史は非常に古く、首都サナアは2,500年以上前から人々が暮らす、現存する世界最古の町とも、アラブの文明が発祥した地とも言われているらしい。またかつては、アフリカの宝石、インドのスパイス、中国の絹など、様々な物品が船で運ばれた港もあり、海のシルクロードの中継地としても栄えていたみたいだ。



(C) Sayaka@Yemen

新市街に宿をとった僕は、旧市街まで行き散策してみることにした。新市街は趣の少ない背の低い建物が多く、統一性のないような印象だが、旧市街に入ったとたんに建物の雰囲気ガラッと変わる。建物の壁はカフェモカ色のレンガが積み重ねられ、窓枠は白色で縁取られ装飾されている。まるでホイップクリームで細工をされたケーキを思わせるような建物がひしめき合っているのである。サナア旧市街の町並みは1986年に世界文化遺産にも登録されていて、それまで半年以上観光を続けて多少観光に飽きがきていた僕の両腕にも、ざわざわと鳥肌を立たせるほどの迫力があつた。



(C) Sayaka@Yemen

日差しの中では白っぽく、また日陰の下ではチョコレートのような不思議な色を醸し出すその風景は、まさにアラビアンナイトの世界に迷い込んだかのような錯覚さえ起こさせる。景色をただボーっと眺めているだけで、幸せな気分になるのだ。

建物の展望だけでなく、イスラム圏で暮らす人々は服装が特徴的だ。



(C)Yoshinao Okabe

女性は、真っ黒なアバヤという黒装束に身を包み、目と手足の先以外の全てを隠しているため、極めて露出が少ない。長期間イスラム国家を旅していた男性の旅人が、女性の足首を見ただけで勃起したという笑い話があるくらいに露出がない。それにしてもお互いの目を見ただけで、それが友達だとか親戚だとか判別できるのだろうか心配してしまうが、すれ違いざまに声を掛けているようなので、目や声の特徴だけで見分けは付いているのだろう。

男性は、真っ白なイスラム民族衣装のカンドーラを着ている人ばかりが歩いているのを想像していたのだが、意外にもジャケットとシャツ、スラックスのような格好をしている人もいれば、巻きスカートのようなものを履いている人が多い。それにカンドーラを着ている人も、ジャケットを上羽織っていたり、頭に孫悟空が付けているような黒い金冠を被っている人はほとんどいない。

そしてイエメン人男性の最も特徴的なのは、ジャンビーアという剣を腰に挿して、町中を闊歩していることだ。全てのイエメン人男性ではないが、30～40%の男性はジャンビーアを挿しているのではないだろうか。一人前の戦士の象徴であり、誇り高いイエメン人だという証らしい。



(C)Yoshinao Okabe

(C)Yoshinao Okabe

また、昼頃を過ぎると、なにやら葉っぱを口にひたすら詰め込み、おたふく風邪にかかったかのように頬を膨らませている男性が極端に増える。喋る口からは真緑状のものが見え隠れし、正直汚いのだが、頬の中にどんどん葉っぱを詰め込んでいく。



(C)Yoshinao Okabe

これはカートという葉っぱで、イエメン人の趣向品の一つなのだが、カートのエキスには軽い神経興奮作用があり、他のイスラム国家だと違法なのだが、イエメンでは合法的な趣向品として重宝され、彼らはカートを楽しみながら、宗教や政治についての話をしたり、社交を持っているらしいのだ。ただ、カートは生鮮もの。カート専門のスーク（市場）もあり、鮮度や質の高いものと数千リアル（数千円）位するらしいので、毎日のようにカート、カートとなっているイエメン人男性達を見ると、アラブ最貧国とも言われる所以はカートのせいじゃないかと心配してしまうくらい、みんな好きなのだ。



(C) Sayaka@Yemen

そんなある日、僕はイエメンにアラビア語を勉強しに来ている日本人に出会い、イエメン人の友人を紹介してもらった。

旧市街にある、それこそアラビア半島を代表する巨大なスーク（市場）の衣料品店で働いているトフィークは、イエメン人には珍しく英語を話せるので、イスラム教徒の結婚についてや、仕事について、日本で働きたいという願望まで話してくれた。それに、彼のお店に遊びに行くと、その周辺の店の店員もアジア人を珍しがって近付いてくる。

彼らは我々日本人もたまにやるように、アラビア語で僕に何かを言わせたがる。おそらくあまりよろしくない言葉だったり卑猥な言葉なのだろうが、僕が彼らの言葉を真似て発音すると、大爆笑するのだ。また彼らは僕に「ワルダン」というアラビックネームを付けた。人をコ馬鹿にする時に言う名前のようなが、親しみを込めて付けてくれたので、僕はありがたくその言葉をいただいていた。いつも僕がお店に遊びに行くと、「ワルダン、ワルダン」と寄ってきてくれて、お昼時には食事に招待してくれたり、カートと一緒に楽しんだり、僕が客引きをするなどお店の

手伝いをした。通りすぎるイエメン人たちも、得体の知れないアジア人が客引きをしているものだから、タダでさえ大きな目を見開いて振り向いたりする。そんな時間がとても楽しかった。

さらに、同年代のトフィークたちとは違い僕には父親世代ともなる、ハラジーという方も紹介してもらった。ハラジーは、旧市街の中心であるバーバールヤーマンという門に店を持っていて、そこで新聞を売っている。今思えば、父を亡くしている僕には父親にも似た親しみが沸いていたのだろう。

ハラジーは新聞を売っているほかにも写真館を経営しているらしく、一緒に写真館で写真を撮ってくれてプレゼントしてくれたり、一緒にシャーイ（ティー）を飲んだり、お昼をご馳走になったり、大変お世話になった。

僕がハラジーのところに遊びに行くと、決して軽そうとは言えない体を左右に揺すりながら、必ずといっていいほどシャーイをご馳走してくれて、アラビア語のハラジーと、日本語の僕の会話が始まる。ほとんど言葉の会話としては成り立たっていないのだが、ジェスチャーを交えて伝えようとするお互いの気持ちが、なんとなく会話をさせてくれているように感じる。耳から聞こえる言葉を超えて。



(C) Sayaka@Yemen

(C) Sayaka@Yemen

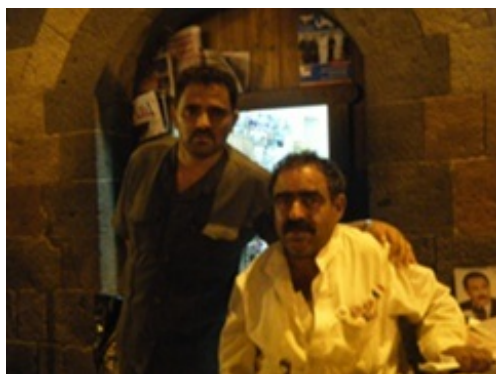
旧市街で楽しい時を過ごしたり、ソコトラ島まで足を伸ばして観光したり、ツアー観光に参加したりして、イエメンの滞在があっという間に3週間過ぎた。旅を続けるべく次の国へと向かう時が来た。僕はいままでお世話になったトフィークや仲間達、ハラジー、などに別れを言い旧市街に向かった。

スークのみんなは、次はいつイエメンに来れるんだ？とか、また必ず来いよ、と笑顔で見送ってくれ、僕も笑顔で別れを告げた。

ハラジーは、帰る日の夕方に別れを言いに行った際、涙目になって見送ってくれ、さらにその時に「さよなら」をしたはずなのに、その数時間後にホテルまで遠い道のりを見送りに来てくれた。短期の旅行で訪れただけの僕のために、涙目で見送りに来てくれて、ホントに悲しそうな顔をしてくれるハラジー。もらい泣きしそうになった。

さらに深夜にもかかわらず、トフィークも空港行きのタクシーに乗る時間に見送りに来てくれた。これが一生の別れではないと思ってはいても、気軽に行き来できる距離ではないことをお

互いは認識しているので、楽しい時間を過ごせば過ごすほど、別れというのは辛くなるんだろう。



(C)Yoshinao Okabe

イエメンはアラブ最貧国と言われるほどあって、人々の暮らしぶりは決して豊かであるとは言えない。物価も他のアラブ諸国に比べて極端に安い。ただ、人々の温かさ、優しさ、思いやりに溢れ、ホスピタリティがあり、絆を重んじる。そんなものが、アラブ最貧国といわれながら未だに『幸福のアラビア』、『幸福のイエメン』といわれている所以なのであろう。



(C) Sayaka@Yemen

空港に向かうタクシーに乗り込んだ僕の目には、見送ってくれるハラジーとトゥフィークが、目尻から溢れそうになる涙で滲んで見えていた。

2011年1月、イエメンでは、チュニジアから波及した大規模反政府デモが起こった。デモ隊と治安部隊などが衝突し、現在までに300名以上の死者も出ているという。外務省からも2011年8月現在、退避勧告が出ている。

一刻も早くイエメン共和国に本当の平和が訪れ、その美しい町並みや自然、イエメンの人々の暮らしをまた僕らに見せてくれることを願っている。

『十人十旅』

旅先で、驚愕の騙された体験やガックリ落ち込んだこと、自分を全面的に否定したくなる失敗、なかったことにしたい勘違いなど、「旅の恥はかき捨て」とはよく言ったものである。そんな青ざめたり赤面したりなトホホな話をTwitterでRTやDMから拾って抜き出してみました。

@kobatoma16

モロッコで家の門に彫られている模様の写真を撮っていたら中から住人が出てきて、「家の中見るかい」と言われた。中には家族もいたので安全かと思って入れてもらったが、その男が妙な手つきで体を触りだしたので貞操の危険を感じて、適当なことを言って家から出た。まさか家族の前でコトには及ばんだらう。とも思ったが、家から出てもついてきて「飯でも食べてけよ」とかしつこいから、走って逃げた。そしたら後ろで「ファイブダラー—！」って叫んでた。体がダメなら金か！と思った（笑）

@taniwheelie

レバノンでの出来事。野犬に追われて逃げ切れずやむ迫えず民家に逃げ込みました。そうしたら民家の住人が「日本人が急に訪問してきた！めでたいことだ！」と興奮し、僕の歓迎パーティーを開いてくれました。

@tadahiroshi

「首長族に会える」って言われて日本円で45500円払って山に登ったら、首長くない民族の村に着きました。

@kimkatsu

ザンジバル島の電気のきてないエリアで黒人の女の子と夜2人で村の方へ歩いていたら、懐中電灯消してと言われ、ムフフと思ったら、次の瞬間、道の脇にしゃがんで放尿してた。

@taniwheelie

ヴェネズエラとブラジルの国境（ヴェネ側）。検査官が「おまえは怪しい」と自分は別室に連れて行かれた。カバンを渡すと「違う違うお前の下半身が怪しい」と。結局パンツを脱がされ下半身をジロジロ見られたのち解放されました。ちなみに、カバンと上半身のチェックは無。

@rube_shu50

インドからタイへ入国。BPに行ったが体調不良ですぐにタクシーで病院へ。そして入院。一週間後退院。退院当日、病院から空港へ。そして帰国。初めてのタイは病院ライフを満喫しました。

自炊派の手料理

旅に出たら現地の料理を食すに限る。でも物価の高い街での長めの滞在となると、さすがに外食ばかりはフトコロに堪える。そんな時は自炊。簡単で安くて美味しい自炊派の手料理をご紹介します。

「とろとろスープ」 四人分

どこの国でも比較的簡単に安く手に入る材料で美味しくあったま〜るスープ。



準備するものは

- タマネギ．．．．．一個
- ガーリック．．．．．一片
- 油．．．．．少々
- チキンブイヨン．．．．．一個
- トマト缶．．．．．400ml
- 水．．．．．300ml
- 小麦粉．．．．．100g
- 塩&胡椒．．．．．少々

作り方

- ① タマネギとガーリックをみじん切りにする。
- ② 油を少し入れた鍋に、ガーリックとタマネギをしんなりするまで炒め、トマト缶、水(300ml)、チキンブイヨンを入れて沸騰させる。
- ③ 沸騰するのを待っている間に、小麦粉に水(150ml)を加えて練る。固さは練った小麦粉をスプーンですくって、落とした時に「飲むヨーグルト」くらい軟らかければOK！
- ④ 鍋の中が沸騰してきたら、小麦粉をスプーンですくいながら、鍋の中にポタポタと落としていけば、面白いように小麦粉が丸く固まるので、温度を下げないように気を付けながら、小麦粉を全部落として、ひと煮たち。塩胡椒で味を整えて完成！！（辛くしたければ、最後にチリソース）

とろりとしたスープにすいとんのようなパスタのような食感の小麦がおいしい。意外にお腹いっぱいになり、満足感アリ。自分の好きな材料を入れたり、余った材料を投入すれば豪華なスープに変身！

■情報提供

谷津 達観(やつ たっかん)

料理一筋！懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、世界一周の旅に！

現在、夫婦で旅に出て9ヶ月。一年の予定で現地の食材や料理を学びながら旅をしています。

食べるのも、作るのも大好き！

「家から徒歩1年☆たっかんとじんみ2人世界一周」

<http://ameblo.jp/worldjourney2010/>

■Writer&Photographer

Chibirock

■Age

33歳

■Profile

Sigur RosとBeirut最頂のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>

4. 台湾朋友のリッチな実家へ1泊旅行 《台湾・台南編》

平日のスケジュール。朝起きる→朝飯食べる→ごろごろ→昼飯食べる→昼寝する→夕方散歩行く→ビール買って帰る

気まますぎも本当によくない。やっぱり人間、何がしか「やらなきゃいけないこと」がないとよくない。修行のつもりで日本出たのに、日本以上にぬるい湯につかることになるとは！こんな状態じゃインドの地踏んだとたん即死しちゃいそうだよ！つことで1日1時間命がけでウォーキング。など、自分に厳しい義務を課すんだ。

週末は我的台南朋友達が、貴重な時間をつぶしてあたしを連れ出してくれる。今週の、「モー街は疲れた！田舎に行きたいよ！」というあたしのワガママに、阿銘&テイミーのカップルはテイミーの実家に行こうというプランにてお応えしてくれた。

台南から高雄を経由して電車で1時間のところに、テイミーのホームタウン、「屏東（ピンドン）」の街があるのです。駅に迎えに来てくれた、やたらお若いテイミーのお母さんは、なぜだか片言の日本語を操り、いろいろ話しかけてくれた。

とりあえず近場の田舎っぽいところに行きたいと思って、屏東近くの「三地門」ってどうよ！と提案したところ、昼間行っても死ぬほどなにもないんだよ！ってことで、そこにある夜景の見えるレストランに連れてってくれた。不思議とバリのような蒸し蒸しした雰囲気、四方八方完全オープンなレストラン。サバサバしたお母さんと甘えんぼのテイミーの相性がぴったりなようで、この親子は友達みたいに仲が良く微笑ましい。

花のサラダ with やたら甘いマヨネーズや、エビ揚げたやつとか、いかんせん何食べてもパツとしない台北じゃ考えられないくらい、おいしく楽しくいただきました、三地門ディナー。ごっそさんです！

ちなみに、薬膳スープに入っていた真っ黒い鶏の足先を食べようとしたところ、そんなもの食べるもんじゃない！と止められた。香港の飲茶じゃ人気料理だがな...、微妙な文化の違いに戸

惑う。

その後、テイミーの実家に行くと、テイミーのお母さんは一人で、景色のよいマンション10Fにございます4LDKに住んでいる事実が発覚。なんすかこのゆとりあるお住まい。後からこっそり、阿銘に、あのうなんでこんなにお母さん金あんの？と聞くと、離婚してるけど豚足料理の店で儲かってんだよ、とのこと。

豚足ドリーム！

お母さんは最近凝ってるというアイスワインなるものを出してくれたのち、忙しそうにお姉さんところに出かけていった。一瓶、1万円。アイスワインて何よ？と半信半疑でこれまたゴージャスでずっしりヘビーなグラスでいただきましたところ、あら、なに、これ！そんな1万円を、うっかり、1本まるまる、飲み干したのは、わたしです。今この場をかりて深くお詫びいたします。

翌日のランチは、テイミーのお母さんがやってる豚足料理の店に。タクシーで行こうとしたところ、なんと地元なのにボッタくられたとのこと。通常地元の方はタクシー使わないし、ガキだと思われて50ドルくらい余分にとられたらしい。地元でもそういうことあるんだと思うと、外国人なんてボられて当然だな。久々に、ここは日本じゃないんだ感をかみしめた。

タクシー運転手の名前をチェック。「呉萬得」。なんかちゃっかりしてそうな名前してるもの。屏東でこのタクシーにもし乗ったら、カマキリの卵でも仕掛けておいてください。食らえ時間差アタック。

ま、なんやかんやありましたけども、着きました。なんちゃら、大王。自信満々なネーミング。完全なる家族経営らしく、この人はわたしのお母さん、この人は叔母さん、この人は弟の奥さん...と永遠に続くとも思われた家族紹介ののち、お料理がやってまいりました。豚足の煮込みと、客家風の麺。これ両方ともめっちゃ美味しかったんだが、豚足料理屋の娘は、非常に残念ながら豚足のプルンプルン部分が嫌いとのことで、プルンプルン部分を取り除いた別皿で食ってた。プルンプルン部分のおかげでここまで大人になれたのに...と思うと歯がゆい気になったが、致し方ない。

田舎で楽しい週末を過ごし、すっかりゴキゲンChibirock。今回お世話になった屏東の皆様、いつまでもお元気で。好吃なごはん（とワイン）ごちそうさました～！

追記：あたし、金あっても、4LDK住めない。（掃除できない）

5. Jedi的太極拳修行乃朝 《台湾・台南編》

昔は会社帰りに太極拳に行くため、ジャージで出勤したこともあった。（会社所在地：東京都

心ド真ん中、外苑前)

中華圏じゃー、朝の公園といえば健康を意識なさる老人、否、ジェダイ天国。とゆことでマシオンすぐ向かいの公園に早朝いってみればいますいます健康生活ひとすじの中・高年のジェダイ。

公園の細道を行き、まず手前に見えますのは、リズムカルにケツをフリフリするジェダイチーム。腰回しダイエットと同じような発想のフリフリと推測される。ミディクロリアン値は比較的高い（嘘）。

次に右手に見えますのはおそろいのユニに身をつつみ、ラジオ体操風な動きをBPM40くらいでおこなうジェダイ。おもに女性。全員パダワンだそう（嘘）。そのほかソロで、全身をとにかくひっぱたきまくる女性、ベンチのカーブ部分にねそべり身体を伸ばしまくる男性、はたまた腕を力任せにブンブン振り回しまくる老人など、みなさん思い思いの修行に忙しそうである。

果たして、ジェダイ評議会（またの名を太極拳団体）も案外すぐに発見した。一番はじっこのマスターに、「可以～？（いいかな～？）」と聞いてみれば「オッケオッケ！あんたよくわかんないだろうから真ん中いきな！」（想像訳）

結構四方八方向くので、初心者は通常どの向きでも他の人の動きが見れる位置にくるんである。ということで初っ端ど真ん中で参加。太極拳の修行にはいろんな様式があって、そのうちの一部しか知らないけど、朝っぱらから久々のロングバージョンは結構身体にこたえたぜ。基本常に中腰、どっちか片方の足だけに体重をかけてゆっくり動く、てね、結構きついでよ。

数パターン終えたのち、ジェダイマスターたちは各々のライトセイバー（太極拳用刀）を取り出し、修行に励む。マスターたるもの、日々の修行は怠らない。それがエピソード2でヨーダがドゥークー伯爵相手に見せたような、驚愕の剣技に通ずるのである！

猛突進してくるバイクをフォース（手）で制し、信号無視して道路を渡れるまでになったけど、今後よりいっそうカオスな国々へ入るにあたり、さらなる鍛錬の必要性をモリモリと感じている。

さ、明日も修行に励むべく、そろそろ寝る、としたいところだけどビールが飲み終わるまでは夜を楽しむとしましょう。

では、フォースと共にあらんことを。

ただ今、台南から彰化に向かい中。自由席の切符を買ったものの、どうやら今座っているこの席が、指定席である可能性が非常に高くなってきたので、途中駅で止まるたびに「そこ、俺！」って怒られんじゃないかとヒヤヒヤしているなう。今のところ4駅クリア。あと1駅で全クリ。

さて、バイクで駅まで送ってくれたデイミー（昨日まで「テイミー」だと思ってた）と別れ、一人旅開始直後、早速もやもやな現象が発生。券売機で彰化行きの切符が買えず、ウロウロしていたところ、カイ・シデンばりに狡そうな顔の男が、どこに行くのか、っぽいことを話しかけてきた。貴重品類をがつつりカバーしつつ、彰化に行くけど切符をまだ買ってない、と言うと、俺が乗る電車で行ける、とのこと。カイ・シデンの切符を見ればあと数分で発車する。急いで急いで！と急かされると途端にめんどくさくなり、自分で買うから！ありがと！と遠慮するも聞く耳持たず、ってか耳自体無いのかってほどにカイ・シデンは取り憑かれたように券売機のボタンを押しまくる。うまいこと彰化行きの表示が出て、金を券売機に入れようとするもうまくいかず、何度も戻ってくる。カイ・シデンは「俺が買う」と自分の財布から500円を出すが、それは結構、とお断り。一旦取り消しすることにした。

あれ。

251円だったから300円入れようとしてたはずが、今手元には200円しかないね。あたし300円入れたよね。と聞くも、英語わかりませんのキョトン顔。

こいつやりやがったか？

しかしマイチ300円入れたか確信持てず、あいかわらずのキョトン顔なので、これ以上突っ込めず、なんかもう一人になりたくなってきたので、ATM行ってくるから電車のって君は！とその場を離れた。

しばらくぶんの金をおろして、また券売機に戻ると、カイ・シデンはまだそこにいて、早く買いな！とせかす。あれ、うーん。チョロまかしたら普通さっさと消えるよね。あたし明らかに警戒したし。勘違いなのか？もう考えるのも面倒すぎて、自分で買うからいいよ、と首をふりまくと、彼は改札通ってホームに消えてった。

様々な角度から検証すると悪人：7割 善人：3割の割合だが、万が一善人だったらカイ・シデンは自分の切符を無駄にしてまで尽力してくれたことになる。

しかし台湾本を見れば、乗りそびれても払い戻しはできるようなので、いずれにせよたいして損はしていないようだ。まあ、100円（260円）チョロまかされたとしても、いい。気合い入りました。

友達に囲まれて、ぬくぬく楽しかった日々は思い出としてそっところろにしまいこみ、改めて、一人旅始めます。

ひとまず、指定席らしき席からは追い出されず、無事彰化に到着しました。なんだこの清々しい達成感。

生あったかく、見守ってちょうだい。では、飲むね。

旅の便利グッズ

旅に持って歩く基本的なグッズとは別に、意外と役立つとか、この地域に行くなら便利など、人によって便利なグッズを知ってたりする。これから旅にでる人はご参考までに。（投稿によりまでするので、かなりな個人的見解になってます）



■充電電池

最近は何度でも充電できる便利な充電電池が増えてきました。これを使わない手はないでしょう。携帯電話やカメラなどこれでカバーできます。難は重いことですね。



■ペットボトル

お湯を入れると冬は湯たんぽに早変わり。そして洗濯物を巻いておくとすぐ乾く。500mlサイズは靴下用に便利。@genzo_tomikoさん情報



■物干しロープ

ドミトリーなんかで役に立つ物干しロープ。ベッドの柵に沿って張り巡らすと、結構な量が干すことができます。ロープに穴が開いているので針金ハンガーも流れて片寄ったりしません。



■トラベル湯沸しポット

実は先回創刊号で載せたところ、もっと使い道があると@genzo_tomikoさんより寄せられました。その使い道とはなんと、蓋を外すと沸騰しっぱなしになるらしく、ほうれん草、ブロッコリーやジャガイモからパスタまで茹でられて重宝したというものでした。ちなみにそのポットはトルコで15TLだったそうです。

世界のマクドナルドコレクション

世界のいたる所に存在するファーストフードショップのマクドナルド。
今回はそんなマクドナルドをコレクションしてみた。

■アメリカ（LAから東に2時間いったあたりにあったマック）



バーガー、サラダ、ドリンク、全部巨大

サラダがどんぶりサイズ



キノコ入りとか、案外凝ってる

■フランス（パリ）



フランス語になるとマックのメニューも上品なようなそうでないよう
な



パリのマックは重厚感あり



かわいらしい箱に入っているバーガー

■インドネシア（バリ）



警備員がものものしくドアを開けてくれます



おいしそうなラップサンド



開けてガッカリ

■インド（ジャイプール）



緑の日の丸はベジメニュー 噂のチキンマハラジャマックは、タンドリーチキン入り インドではチキンが人気

■チェコ（プラハ駅近く）



モーニングセット

バリューセットのようなもの。ベーコンビッツの乗ったバーガーはパンモチモチで超うまい

■台湾



ポンドリングの次に絶賛された、ライスバーガー

■ポルトガル（リスボン）



いつでも混んでる マックオリエンタルは何がオリエンタルか不明だけどとても美味しかった

■スペイン



雑

たくさんの旅の話を読んでいると、とにかく旅に出たくなります。さらに読んでいると旅はダンスや音楽と同じく表現活動と似ているなと感じます。旅で感じ学び自己を見つめ鍛えられ、発表する。あるいは活かす。それが自分のため、または誰かのためになるのではと。

今回は創刊号よりも多くの人に関わっていただきました。このBraliをもっと多くの人にシェアしてもらえたらと願っています。

次回はさらに多くの人に関わってもらえそうだし、新しい連載企画が増える予定をしています。次号も楽しみにしてください。

それと、読みはじめや読み終わりに「Braliなう」「Brali読了」とかTweetしてもらえるとありがたかったりします。

作者・情報提供者一覧

作者・情報提供者一覧

テーマ「出会い」そこにある出会い 本文＆写真

兼清俊太郎

協賛金を募りながらアジアを旅する天然パーマな22歳の大学生。一昨年は100冊読書＋書評、昨年はロンドンへ語学留学、今年はアジア放浪の旅。来年は大学生活最後、留学と旅をもとにした本を出版したいけど未定。

<http://ameblo.jp/shun-travel/>

テーマ「出会い」 バングラデシュで姫になる

本文＆写真

田中美咲

少しでも多くの人が心から幸せを感じるような、対話のプロになる。1988/8/26(A型)です。

KEY WORD: バックパック旅(205日6大陸22カ国51都市)/瞑想修行/クリエイティブの可能性前世はインドの姫/ヨガ/コーチング/渋谷で働くソーシャルアプリプロデューサー

Twitter: @misakitanaka

テーマ「出会い」 隕石を食べさせるモンテネグロ人 本文＆写真

laidbacktrip

2007年12月に日本を出発。

チベットでDJ、インドでスノボ、イスラエルで映画俳優、ヒッチハイクでヨーロッパからサハラを越え、西アフリカで鼻血ブ～。

<http://jetkey.exblog.jp/>

テーマ「出会い」 笑顔の世界地図 本文＆写真

ワールドハッカー

元バックパッカーで、現在は職業ハッカー。

ブログ「World Hacks!」にて、海外旅行関連の情報を毎日発信しています。

<http://bit.ly/WorldHacks>

Chibirockの旅はくせもの 本文＆写真

アジア漂流日記 本文＆写真

世界のマクドナルドコレクション 本文＆写真

Chibirock

Sigur RosとBeirut最良のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家

で大豆を選び分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>

HANGOVER in the WORLD ミャンマービール 本文&写真

五十嵐圭

2011年4月に会社を辞めて半年間のバックパック旅行中。

初めての一人旅に戸惑いながら東南アジアを中心に

フラフラと移動しています。

ブログ：つれづれ報告書

<http://turedure2006.blog.so-net.ne.jp/>

表紙写真

旅人からの伝言 特集中東改めイエメン イエメン 本文&写真

鈴木モト

男性 静岡県出身。高校時代、陸上でインターハイ出場。ベストタイム10秒84（100M）
美容師免許、管理美容師免許取得。

MIXIコミュニティ、「鈴木が書く世界一周旅行記が好きだ」2800人突破。

http://mixi.jp/view_community.pl?id=3502328

現在、一眼レフカメラ片手に世界を放浪中。

ブログ「地球の迷い方。～世界放浪編～」

<http://ameblo.jp/roundtheworld200130/>

旅人からの伝言 特集中東改めイエメン 初アジア、初中東のイエメン旅 本文&写真
bin

2009年春に初海外&初一人旅をデビューし、これまで東欧を中心に10ヶ国てくてく散歩。好きな国：①チェコ②ブルガリア③イエメン。

Blog：【bin】世界中がおもちゃバコ

<http://bintravel.exblog.jp/>

旅人からの伝言 特集中東改めイエメン 幸福のアラビア「イエメン」サナア 本文
岡部能直

世界の絶景や世界遺産を中心に旅を続ける旅人。七大陸制覇の経験を生かし、世界各国についての旅コラムを執筆。『世界のどこかで何か叫ぶ・・・かもしれない。』

<http://ameblo.jp/ok-be/>

旅人からの伝言 特集中東改めイエメン 幸福のアラビア「イエメン」サナア 写真

Sayaka

100カ国訪問を目指し、世界の秘境、民族、珈琲を求めて女一人旅。現在61カ国。

「WORLD JOURNEY」

<http://ameblo.jp/sayaka821/>

自炊派の手料理 とろとろスープ 本文&写真

谷津 達観(やつ たっかん)

料理一筋！懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、世界一周の旅に！

現在、夫婦で旅に出て9ヶ月。一年の予定で現地の食材や料理を学びながら旅をしています。食べるのも、作るのも大好き！

「家から徒歩1年☆たっかんとじんみ2人世界一周」

<http://ameblo.jp/worldjourney2010/>

協力

向井通浩

JAPAN BACKPACKERS LINK 代表・運営管理者。「ハニートラップ研究所」所長。タイマッサージ依存症。ホワイト餃子。

<http://backpacker.ninja-x.jp/>

9月1日から、

<http://backpacker-link.com>

■テーマ「遺したいモノ・コト マイ世界遺産」

■おしえてタビテク

■旅で使えるデジタルアプリ

■HANGOVER in the WORLD

■Chibirockの旅はくせもの

■旅人からの伝言 特集中南米

■トホホな話

■旅の便利グッズ

■自炊派の手料理

■アジア漂流日記

■世界のコレクション

■変な日本語

■お勧め！年末年始のバックパッカー

さらに、

「情熱さえあれば不可能なことはない～ 韓国人青年の世界旅行記～」

１３歳でたった一人で韓国を旅し、その１０年後には８０万ウォン(約６４,０００円)だけを持って世界３０カ国にも及ぶ世界旅行を敢行した韓国人青年ジョン・サングン。後に韓国で発売された彼の旅行記「８０万ウォンで世界旅行」は多くの若者に勇気と希望を与え、発行部数は４万を超えた。旅によって変わった彼自身の人生を、３回のエッセイを通して綴る。国内初書き下ろし。

しかも、

バックパッカー界のキーマンへの単独リレーインタビューを敢行する連載企画もスタート。

他にも連載企画を予定しております。

また連載企画も募集しておりますので、募集要項をお読みになってドシドシお寄せください。

記事と情報および写真の募集要項

次回のBraliの発行予定は10月25日です。

下記の記事や情報をお気軽にお寄せください。ご応募いただきました中から厳選させていただきます。

★記事および情報

■テーマ「遺したいモノ・コト マイ世界遺産」

心に遺したい、この世に遺したいなど、遺したい文化、ある民族の家族愛、面白い言語、ホスピタリティ、グッズ、自然環境や自然景観、文化遺産など。世界が認めなくてもワタシは認めるマイ世界遺産について。

→1500字から2000字程度

■おしえてタビテク →その国その地域だけで使えるテクニックなどを教えて下さい。

■旅で使えるデジタルアプリ →旅で役に立ったアプリを教えてください。

■HANGOVER in the WORLD →旅先での酒や酒場にまつわるショートコラムをお待ちしています。

■旅人からの伝言 特集中南米

→1500字から2000字程度

■旅の便利グッズ →旅で便利だったグッズを教えてください。

■変な日本語→海外でよく目にする「変な日本語」。写真とどこで撮影したかを教えてください。

■お勧め！年末年始のバックパッカー

一週間から10日程度で楽しめるバックパッカー旅行ルートを推薦してください。（実際に行った方のみお願いします。）

例えばインドのデリーからアグラ、バラナシ、コルカタ、そしてバングラディシュのダッカ。スペインのマドリッドからセビージャ、コルドバ、グラナダ、バルセロナそしてマドリッドなど。いくつかのケーススタディをみんなで作ってみたいです。移動方法や滞在した都市で鑑賞したものや食事などのコメントを付けて頂きます。

★写真

■Brali表紙用写真

★企画

■連載企画の持ち込み

3回以上の連載企画をお寄せください。旅に通ずればジャンルは問いません。

紀行、エッセイ、コラム、ポエム、短文、座談会、インタビューなど。

→ 1 回の投稿につき 2 0 0 0 字以内。

記事投稿および投稿に関するご質問はメールにてお願いします。

bralimagazine@gmail.com

Brali Vol.2 (テキスト版)

<http://p.booklog.jp/book/32885>

編集者：くりはらのぶゆき

編集プロフィール：<http://bralimagazine.blogspot.com/>

Twitter：<http://twitter.com/2moratorium>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32885>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32885>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.